ミラノ霧の風景

Paesaggi nella Nebbia

須賀敦子

Suga Atsuko

ミラノ霧の風景

Paesaggi nella Nebbia

須賀敦子

Suga Atsuko

白水社

著者略歴
聖心女子大学卒
イタリア文学専攻
上智大学教授
主要訳書　J. Tanizaki, *Vita segreta del Signore di Bushū*
(「武州公秘話」)
Y. Kawabata, *Il suono della montagna*
(「山の音」)
ナタリア・ギンズブルグ「ある家族の会話」
「マンゾーニ家の人々」
アントニオ・タブッキ　「インド夜想曲」
「遠い水平線」

ミラノ　霧の風景

1990年12月14日第1刷発行
1994年5月10日第16刷発行

著　者　© 須賀敦子
発行者　藤原一晃
印刷者　山田隆

発行所　101 東京都千代田区神田小川町3の24
電話 03-3291-7811(営業部), 7821(編集部)　株式会社白水社

振替　00190-5-33228　精興社印刷・松岳社青木製本

ISBN 4-560-04179-2
Printed in Japan

目次

※ミラノ　霧の風景

遠い霧の匂い※5
チェデルナのミラノ、私のミラノ※13
プロシュッティ先生のパスコリ※29
「ナポリを見て死ね」※47
セルジョ・モランドの友人たち※71
ガッティの背中※87
さくらんぼと運河とブリアンツァ※107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

マリア・ボットーニの長い旅※124
きらめく海のトリエステ※142
鉄道員の家※161
舞台のうえのヴェネツィア※179
アントニオの大聖堂※197
あとがき※215

装幀❖伊勢功治

遠い霧の匂い

乾燥した東京の冬には一年に一度あるかないかだけれど、ほんとうにまれに霧が出ることがある。夜、仕事を終えて外に出たときに、霧がかかっていると、あ、この匂いは知ってる、と思う。十年以上暮らしたミラノの風物でなにがいちばんなつかしいかと聞かれたら、私は即座に「霧」とこたえるだろう。ところが、最近の様子を聞くと、この霧がだんだん姿を消しはじめたようである。ミラノの住人たちは、だれもはっきりした理由がわからないままに、ずっと昔から民謡やポップスに歌われてきた霧が、どうしたことか、ここ数年はめずらしくなったという。暖房に重油をつかわなくなったからだと言う人もいる。そうだろうか。あんな霧、なくなったほうがいいですよ、とミラノに住んでいた日本人は言うが、古くからのミラノ人は、なんとなく淋しく思っている。

もう二十年もまえのことになるが、私がミラノに住んでいたころの霧は、ロンドンの霧

など、ミラノのにくらべたら影がうすくなる、とミラノ人も自負し、ロンドンに詳しいイタリアの友人たちも認めていた。年にもよるが、大体は十一月にもなると、あの灰色に濡れた、重たい、なつかしい霧がやってきた。朝、目がさめて、戸外の車の音がなんとなく、くぐもって聞こえると、あ、霧かな、と思う。それは、雪の日の静かさとも違った。霧に濡れた煤煙が、朝になると自動車の車体にベットリとついていて、それがほとんど毎日だから、冬のあいだは車を洗っても無駄である。ミラノの車は汚いから、どこに行ってもすぐにわかる、とミラノ人はそんなことにまで霧を自慢した。

夕方、窓から外を眺めていると、ふいに霧が立ちこめてくることがあった。あっという間に、窓から五メートルと離れていないプラタナスの並木の、まず最初に梢が見えなくなり、ついには太い幹までが、濃い霧の中に消えてしまう。街灯の明りの下を、霧が生き物のように走るのを見たこともあった。そんな日には、何度も窓のところに走って行って、霧の濃さを透かして見るのだった。

ミラノ育ちの夫は、霧の日の静かさが好きだった。“giò per i poumon”「ずうっと肺臓の奥深くまで」霧を吸い込むとミラノの匂いがする、という方言の歌を彼はよく歌った。ひどい音痴だったから、歌というよりは、ふわふわした、たよりない雲が空をわたってい

くような音だった。霧の日は、よくポレンタを作った。ポレンタは北イタリア特有の料理で、南ではポレントーネというと、北イタリア人の蔑称である。トウモロコシの粉を火にかけたお湯にふるい入れて、すっかり底が焦げついてしまうまで、ただ捏ねに捏ねて作ったパンの一種で、肉料理を添えて、そのソースで食べる。仕事から帰ってきて、玄関のドアを開けたとたん、夫は、あ、ポレンタだな、いい匂いだ、と言いながら台所に入ってくる。

朝、霧の濃い日は、これはきっと晴れるぞ、と言って、夫は上機嫌だった。事実、午前十時ぐらいになると、うそのように青い空が顔を出す。「ロンバルディアの空は、美しい日には、たぐいなく美しい」――文豪マンゾーニがそう書いている、と夫は出典の真偽のあやしいアフォリズムを唱えるように言って、青く晴れた空をたのもしそうに眺めた。

そんな霧の季節になると、飛行場もまったく無用の長物となってしまう。私たちの家から遠くないリナーテの辺りの霧はとくにひどくて、春が来るまでは飛行場もただの野原同然になった。やあ、飛行機がミラノに降りられなくて、ひどい目に遭いましたよ、と日本からの客はよくこぼした。鉄道の長距離列車の発着もあてにならなくなる。煤煙の匂いがこびりついているようなミラノの中央駅で、いつまでたっても到着しない列車を、何度待

ちわびたことだろう。車の運転も、霧が出ると（立ちこめる、というような詩的な表現は、実をいうとミラノの会話にはない。霧がある、か、ない、だけだ）至難のわざになる。視界二メートルというような日には、車を野道に乗り捨てて歩くこともあるほどだ。一度霧の中に迷いこむと、とんでもない所に行ってしまうからだ。霧の「土手」というのか「層」というのか、「バンコ」という表現があって、これは車を運転していると、ふいに土手のような、塀のような霧のかたまりが目のまえに立ちはだかる。運転者はそれが霧だと先刻承知でも、反射的にブレーキを踏んでしまう。そのため、冬になると町なかの追突事故が絶えないのだった。霧の「土手」は、道路の両側が公園になったところや、大きな交差点などでわっと出てくることが多かった。あるとき、ミラノ生まれの友人と車で遠くまで行く約束をしていたが、その日はひどい霧だった。遠出はあきらめようか、と言うと、彼女は、え、と私の顔を見て、どうして？　霧だから？　と不思議そうな顔をした。視界十メートルという国道を、彼女は平然として時速百キロメートルを超す運転をした。「土手」にぶつかるたびに、私の足はまぼろしのブレーキを踏んでいた。こわくないよ、と彼女は言った。私たちは霧の中で生まれたんだもの。

また、あるとき、夫の友人たちといっしょに、ミラノの南にある田舎の修道院に夕食に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

招かれたことがあった。現在ではおそらく開発されてしまっただろうが、この辺りは『にがい米』という映画に出てくるような水田地帯で、牧草までがマルチーテと呼ばれる特殊な潅漑溝のある水浸しのような畑で栽培されている（だからこの地方の牛肉は水っぽくておいしくない、と土地の人は言う）。この地方の潅漑を設計したのがレオナルド・ダ・ヴィンチだそうで、これもミラノ人の自慢である。ところが、この水が曲者で、霧を生む。

その日は、しばらく会っていなかった友人がおなじ車に乗ったので、話がはずんだ。あっと思ったとき、私たちは郊外に出る高速道路に入りそこねたことに気づいた。もとに戻るには、大まわりをしなければならない。あきらめて、霧の田舎道を行くほかなかった。はじめはなんとか行けたのだが、進むにつれて、私たちは、間違いに気づいた時点で戻らなかったことを後悔しはじめた。霧が自動車のライトを跳ね返すということを、その日まで、私は知らなかった。運転をしていたルチアは、自分の横のドアを開けて、路肩の白いラインを確かめながら走った。そのラインもやがて見えにくくなって、とうとう、同乗のひとりが車を降りて、車の前をゆっくり歩くことになった。やっと目的地に着いたとき、待ちわびた修道僧たちは、てっきり私たちが招待の日を間違えたのだと思っていた。約束の時間に、二時間遅れていた。

ローザ・カルツェッキ・オネスティがわが家の夕食に来てくれたのも、おなじような霧の日だった。夫の親しい友人だったローザは、著名な古典学者でもあり、彼女のウェルギリウスの訳はいまでも定評がある。小柄でひっつめに結った髪、襟のつまったブラウスにプリーツのスカート、ながいこと高校の教師をしていることから生まれた、ゆっくりとした、折り目ただしいイタリア語。彼女は中部イタリアのアドリア海に面したレカナーティという町で生まれた。イタリア人ならだれもが知っているが、一八世紀のロマン派詩人レオパルディの生地でもある。彼女はそれを誇りにしていた。お父さんも、お祖父さんも学者の家系だった。ボーナという名の妹さんと二人で、繁華なポルタ・ヴェネツィアの古めかしいアパートメントに住んでいて、彼女とボーナを二人いっしょに見ると、同じ窯で焼かれた磁器の人形みたいに、動作も感じもそっくりだった。ボーナという名は、カルツェッキ・オネスティ家に古くから伝わる、トスカーナ系の名前だ、とローザは説明してくれた。彼女と話していると、夫までが学校の先生のような口調になった。私はローザに会うと、普段から疑問に思っているイタリア語についての質問をつぎつぎに投げかけた。その反面、自分が彼女の学校の生徒だったら、きっと反抗しただろう、と私はいつも思った。

成人してから彼女に会ったことはさいわいだった。ときには古くさいと思えるようなローザの返答が、不思議に素直に聞けて、そのことが自分にとって楽しかった。

その夜、ローザは、なにか仕事が残っているので、あまりおそくまでいられない、と言っていた。おそくない、と言っても、ミラノの夕食は八時だから、十時にはなっていただろう。霧がひどいから、弟さんのテミが車で迎えに来てくれるはずだった。テミというのは、テミストクレスの愛称で、こんな紀元前のアテネの政治家の名をつけたりするのも、古典学者が輩出した彼女の家の伝統だとローザは説明した。

テミは、しかし、なかなか現れなかった。私たちは、つぎつぎに窓のそばへ行って、テミの自動車が来ていないかどうかを確かめた。車種や車体の色を聞いて、それに似た車が見えると、あ、あれかしらと言ってローザを呼んだ。とうとう、ローザは窓を開け、霧の流れる外気にあたりながら、細い首をのばして、テミの車が来るはずの交差点の方角をじっと見透かしていた。

テミが、その週末、ピエモンテ地方のアルプス山麓までグライダーに乗りに行っていたこと、ローザを迎えに来るのはその帰りだったことを、彼女はその夜、私たちに言わなか

った。それで、来ない、来ないと心配しているローザを、きっと急に都合がわるくなったのよ、と平気な顔でなぐさめて、彼女のためにタクシーを呼んだ。

翌日の新聞で、私たちはテミの操縦していたグライダーが、山に衝突して墜落し、テミが行方不明になったことを知った。生存の可能性はまったくないという。雪が深くて、春まで事故の現場には登れない、と新聞は報じていた。

ミラノに霧の日は少なくなったというけれど、記憶の中のミラノには、いまもあの霧が静かに流れている。

チェデルナのミラノ、私のミラノ

「カミッラ大伯母はスカラ座に桟敷を持っていた。それは彼女がポルディ・ペッツォーリ侯爵の遺産としてもらったもので、舞台わき右側四番目の桟敷だった。大伯母はたいへんな資産家で、たいへんなけちんぼう、音楽好きで、宝石のコレクションが趣味であった。彼女は水腫病をはじめとする様々な病気もちで、ほとんどいつもふせっていた。大伯母が外出するのはスカラ座に行くときだけだったが、そんなとき、ガウンにスリッパという格好で裏階段をあえぎあえぎ上って行った。それはとてつもなく大きなガウンで（深紅色のビロウドに手編のレースをいちめんに縫いつけたしろもので、大伯母が亡くなってから、母はそれを安楽椅子に張らせた）、胸には数知れぬ宝石がかがやき、遠くからでもきらきらと光ってみえた。オペラ・グラスを持っていない人の目にはそれは勲章をちりばめた将軍の胸かとうつった。それぞれの出し物の初日には真珠のネックレス

をつけたが、それはサヴォイア家のマルゲリータ女王のと寸分違わぬもので、ふだんはイタリア商業銀行の金庫に入れてあり、初日以外の上演日には、信頼のおける宝石商にそっくりに作らせたまがいをつけた。ワグナーの歌劇『ラインの黄金』を二十回見たのが彼女のスカラ座における記録だった。

「彼女は、桟敷に訪ねてくるお客用として、いつも〈バラッティ&ミラノ〉製のキャンディーを一袋持って行ったが、人にすすめる分として自分のきらいな味――コーヒー、カラッカ・クリーム、ラタフィアと呼ばれるフルーツ・ドロップ、プラジェラートの蜂蜜など――をあらかじめ選んであった。母はしばしばお相伴で横にすわらされ、大伯母は（真珠貝を貼った）ツァイスのオペラ・グラスを手に、よその桟敷にうちこぼれている著名な美女たちの陰口をたたくのをこよなく愉しんだ。『わるく言っときゃ、まちがいない』というのが大伯母の好きな地口のひとつだった。母の話によると第一次世界大戦後の数年間、場内の照明が徐々に暗くなっていくあの魔法にかけられたような瞬間が近づくと、観客はいっせいにふりむいてトスカニーニの桟敷（もとは三列目の八番、のちに二列目の十二番）に視線をそそいだという。そこにはトスカニーニ令嬢ワリーのあでやかな顔が、毎晩色の違う、ふんだんに使われたチュールの夜会服とピンクあるいは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c